
カゴを持っておつかいに

松果

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

カゴを持っておつかいに

【Nコード】

N2300E

【作者名】

松果

【あらすじ】

小学生の姉妹、ゆいかとみずきはお母さんからお使いを頼まれます。大きな事件があるわけじゃないけれど、二人にとっては大事な一日になりました。「ムーンチャイルド」参加作品です。

カゴを持っておつかいに

五月の最初の日曜日。

台所にいたお母さんが顔を出して、ゆいかを呼びました。

「困ったな、ホットケーキを作るのにお砂糖がちょっと足りないの。ゆいちゃん、『桐やさん』で買って来てくれない？」

「うん、いいよ」

ゆいかは張り切って水色のカゴを持ちました。もう三年生なのですから、お使いは慣れたものです。

「おつかいに行くの？ みいちゃんも！」

妹のみずきがびよんびよんはねながら言います。またか、とゆいかはいやーな顔をしました。

「もう、みずきはお留守番しててよ。あたしがお母さんに頼まれたんだからね」

「や、いつしよに行く！」

「そうだ、二人で行くんなら、レモンと牛乳もお願いしようかな。結構重くなるわよ。持てる？」

「持てるよう。そんならい、ひとりでも大丈夫なのに」

ゆいかは口を尖らせました。
今年一年生になったばかりのみずきは、何でもゆいかの真似をしますがります。

ゆいかが友達と自転車でちょっと遠くの公園まで行こうと話していると、『みいちゃんも！』

髪が伸びたのでポニーテールに結ってもらっていると、『みいちゃんも！』

もう、うつつとうしいったら。

靴のつま先をトントンと地面にぶつけながら、ゆいかはため息をつきました。

外に出ると、まだ五月になったばかりだというのに、夏のような陽射しが待っていました。今日は半そでのＴシャツにしておいてよかった、とゆいかは空を仰ぎました。ツバメが二人の頭をかすめるように飛んで行きます。みずきはそれをうれしそうに目で追いかけています。

「ほらみずき、さつさと歩いてよね。お母さんが待ちくたびれちゃう」

不機嫌な声で言うと、みずきは思い出したように走って追いかけてきました。

ゆいかの髪は真っ直ぐですが、みずきの髪はくせつ毛です。まだあまり長くないのに無理に一つ結びにしているものだから、ポニテールというよりは、うさぎのしっぽみたいにピョコピョコ揺れています。おまけに昨日、乳歯だった前歯の二本目が抜けたばかりなので、これで長い耳でもあったら本当にうさぎみたい。

「お姉ちゃん、みいちゃんにもカゴ持たせて」

「だーめ。すぐ振り回すんだから」

ブンとした顔で、ゆいかはわざと早足で歩きます。

「みずき、一年生になったんだから自分のこと『みいちゃん』なんて言ったらおかしいよ。『わたし』って言うてごらん」

「やーだよ。お姉ちゃんだって時々『ゆいちゃん』っていつてるじゃん」

これは本当のことです。みずきはちっちゃいくせに、たまにドキッとすることを言うから生意気だ、とゆいかはいつも思います。

『桐やさん』は、このあたりに昔からある小さなお店です。本当は他の名前があるのですが、なぜか近所の人には古い屋号の『桐や』で呼ばれているのです。ゆいかの家からは川沿いの道を歩いていけば近道です。表通りまで行けば新しいスーパーもあるのに、なぜかゆいかもお母さんも、買い物カゴを下げて『桐やさん』まで行くのが気に入っていました。

古い木の塀を目印に角を曲がると、桐やさんが見えてきました。

お店の隣では、屋号にもなっている大きな桐の木が明るい紫色の花を咲かせています。木陰に入ると涼しい風が吹いてきて、早足で歩いてきたゆいかはふうつと息をつきました。

「おやあ、ゆいちゃんにみいちゃん。二人とも、もう半そでさんだねえ」

お店の中でキュウリを並べていたおばさんが、声を掛けてきました。

「だって今日は暑いんだもん。あのう、お砂糖一袋ください。あと、牛乳とレモンも」

「お母さんがホットケーキ作るの！ みいちゃん、お使いなの！」
まるで一人で来たみたいにもずきは大きいばりで言います。

おばさんはゆいかの言った物を手際よくカゴに入れてくれました。
「はいよ。砂糖一袋に、牛乳はいつものね。レモンは一個でいいかね」

「おばちゃん、『おまけのミルク飴』は？」

みずきはレジ横の空っぽのガラス瓶をつんつん突いて言います。

ゆいかは慌てて、みずきの腕をぎゅうつとつねりました。

二人がお使いにいくと、おばさんは決まってレジ横の瓶の中からミルク飴を出して、はいおまけだよ、とくれるのです。

だからって自分からおねだりするなんて、とゆいかは恥ずかしくてたまらなくなりました。

「ああごめんねえ。今日はミルク飴切らしちゃった。代わりに『ちびちびパン』をあげようかね」

『ちびちびパン』は小さな細長いラスクのことです。おばさんはここにこしながらちびちびパンを紙に包んで、二人に一個ずつ手渡してくれました。

「わあい、これ大好きー。おばちゃん、おまけはいつもこれでいいよ」

言いたい放題言っているみずきに泣きたくなる思いで、ゆいかは

大急ぎでお金を払うと、逃げるように店から出ました。

「待って、お姉ちゃん待ってよ」

ばたばたと小さな足音が追ってきます。ゆいかは無視して歩いていましたが、木の塀を曲がったところで急に立ち止まり、振り返ってみずきを睨みました。

「ばか！ 自分から『おまけは？』なんて言うんじゃないよ、もう恥ずかしくって死にそうだった！」

「だってお姉ちゃんもおまけ楽しみにしてるじゃん」

みずきは平気な顔をして、紙包みを開けようとしています。

「まだ食べちゃダメ。お母さんに言いつけてやるんだから」

そう言いながらゆいかは自分の分をポケットに入れた……つもりだったのですが。

ポソツと音がして足元を見ると、紙包みから滑り落ちた『ちびちびパン』が、地面に転がっていました。

「あーっ！」

今度こそ、ゆいかは泣きそうになりました。『ちびちびパン』は、ゆいかだって大好きです。それに本当はみずきの言う通り、おまけをもらうのは楽しみだったかもしれない。

「あーら落としたあ、お姉ちゃんたら落つことしたあ」

「うるさい！」

ゆいかがみずきを叩いてやろうかと思った時です。

ガサツと音がして、草むらが揺れました。見ると、黄色い縞のネコです。草の中に低く伏せて、緑色に目を光らせています。

「あ、ネコちゃんだ。おいでおいで」

みずきがしゃがんで手を伸ばすと、ネコは半分逃げる姿勢をとりながら、耳を伏せてファーツと威嚇しました。

「みずき、だめ。引っ掻かれるよ！」

ゆいかは慌ててみずきを引っ張り寄せて、買い物カゴも背中に隠

しました。

黄色いネコは、フンフンと鼻をひくつかせてゆいかの足元を見ている。

「ネコちゃん、『ちびちびパン』が欲しいのかな」

みずきがつぶやくのと同じことを、ゆいかも考えていました。少し離れてみます。

すると思っただとおり、ネコは素早く飛び出して『ちびちびパン』を口にくわえ、あっという間に塀を乗り越えてどこかへ行ってしまいました。

「ね、お姉ちゃん見た？ あのネコ、おっぱいがあったよ」

なんだか秘密でも見つけたみたいに、みずきがひそひそ声で言います。

「うん、お母さんネコだね。きつとどこかで仔猫が待ってるんだよ」

ゆいかもなんだかどきどきしながら同じような声で答えました。

「じゃ仔猫も一緒に『ちびちびパン』食べるんかなあ」

「違うよ。お母さんが食べておっぱいのもとにするんだよ」

それならそれでいいや、とゆいかは思いました。自分が食べ損ねたのは残念だけど、それがネコの親子の助けになったなら。なんだか急に、ゆいかもお母さんの顔が見たくなってみずきの手を引っ張りました。

「さ、早く帰ろ。お母さん、待ってるよ」

「ちよつと待って」

みずきは自分の分の『ちびちびパン』を真ん中で折ると、半分をゆいかに差し出しました。

「はいお姉ちゃん、あーん」

「え？ これみずきでしょ、いいの？」

「だつてお姉ちゃんのはネコにあげちゃったじゃん。だから半分こ。ほら、あーん」

ゆいかは素直にあーんと口を開けておいて、みずきの小さい指にカプツと噛み付くまねをしてやりました。

「ひやはははは」

前歯の抜けた口で笑いながら、みずきも残り半分を口に放り込みます。

「あ、お母さんに言う前に食べちゃったあ」

「いいよ。家に帰るまでにまた落としちゃったらいけないもん。さ、帰ろ」

ゆいかは買い物カゴをみずきの前に差し出しました。

「みずきも持ってみる？」

「うん！ 半分こだね」

みずきは嬉しそうにゆいかと一緒に取手を持ちました。

ゆるらゆるら、水色のカゴが歌うように揺れます。

半そでから出た二人の腕が、時々『ごっつんこ』します。

それが面白くてくすぐったくて、二人は大笑いしながら川沿いの道を歩いて帰りました。

五月の空に、いいにおいの風がツバメと一緒に通り過ぎていきました。

カゴを持っておつかいに

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2300e/>

カゴを持っておつかいに

2009年4月13日23時08分発行